

「千尋あるかげ」

—伊勢物語七十九段をめぐって—

山本登朗

一

伊勢物語七十九段は、在原行平の娘文字を母として生まれた清和天皇皇子、貞数親王の誕生に題材をとった、次のような章段である。

昔、氏の中に皇子生まれ給へりけり。御うぶやに人々歌詠みけり。御おほちかたなりけるおきなの詠める、

わがかどに千尋あるかげを植ゑつれば夏冬誰か隠れざるべき

これは貞数の皇子、時の人、中將の子となむ言ひける。兄の中納言行平のむすめの腹なり。

物語の主人公である「おきな」が詠んだ歌の第二句「千尋あるかげを」の「かげ」は、定家本や塗籠本では「かげ」だが、大島本系（広本系）諸本や真名本では「たけ」となっており、江戸時代の多くの注釈書は後者の本文を採用している。「千尋あるかげ」と「千尋あるたけ」と、どちらの本文がより適切なのか。いま一度、注釈史や典拠、さらには意味内容の面から考えてみたい。

二

室町時代の「伊勢物語惟清抄」や「伊勢物語肖聞抄」

等には、この部分について「千尋あるかげ」とは仙家の竹也」等と記されているのみで、その根拠となる典拠や出典は特に明示されていなかった。契沖の「勢語臆断」に至ってはじめて、具体的な典拠として「山海経」（大荒北経）が、郭璞の注とともに、次のように紹介されたのであった。（以下、漢文の引用にあたっては、便宜上、適宜、振り仮名や訓点を付した。底本の訓点などをそのまま用いた部分もあるが、特にことわらない。）

山海経ニ云ハク「中略有リニ岳ノ山之ト云フモノ一、尋竹生ズレ焉ニ」。注「尋竹ハ、大竹ノ名、長サ千尋」。

これ以後、「千尋ある竹」ないしは「千尋あるかげ」の「千尋」という表現の典拠としては、この「山海経」の「尋竹」の項が、現代に至るまで一貫して指摘されてきたと言つてよいが、実は、宋代の版本や和刻本も含め、いま確認し得る「山海経」諸本に付せられている郭璞の注には、すべてただ「大竹ノ名」と記されているのみで、「長サ千尋」という注記をそこに見ることはできない。そして、そもそも、この「長サ千尋」という注記がなければ、「山海経」の「尋竹」を「千尋」と結びつける明確な根拠は存在しないことになるはずなのである。

同じ「勢語臆断」にはまた、「尋竹」の古い用例とし

て、『文選』（卷三十五）に収められた晋の張景陽（張協）の「七命」の一部が、次のように紹介されている。

文選張景陽七命三云ハク尋竹竦ケテ莖ヲ蔭ス其ノ整ヲ
「七命」の冒頭部、冲漠公子が世俗を嫌って隱棲して
いる「大荒」の「幽山」の様子を描写した部分だが、こ
の「尋竹」について、『文選』の李善注は、さきに見た

『山海經』と郭璞の注をも引用している。しかし、
そこに引かれている郭璞の注もまた「尋竹、大竹也」と
言うのみで、『山海經』諸本と若干の文字の異同がある
ものの、「長^{なが}サ千尋」にあたる記述はこちらにも含まれ
ていない。『勢語臆断』が引用している「長^{なが}サ千尋」と
いう注記の由来は、かくして不明と言わざるを得ない。

また、『大臣注文選』のこの部分には、李善注とともに
に、「尋ハ長ナリ」等という劉良の注も記されているが、
それによれば「尋竹」の「尋」は「長い」という意味の
語で、長さの単位である「千尋」の「尋」とは意味が異
なることになる。『山海經』の「尋竹」を「千尋あるか
げ」ないしは「千尋ある竹」の典拠と考えてよいかどう
か、平安時代の人々が『山海經』の「尋竹」を「千尋の
竹」の意に理解していたかどうかは、このように、いさ
さか疑問であると言わざるを得ないのである。

三

『惟清抄』や『肖聞抄』等の室町時代の諸注釈が、

「千尋あるかげ」とは仙家の竹也」等と注しながら、
その根拠を明示していないことをさきに述べた。そもそ
も定家本を尊重し、「千尋あるかげ」という本文を掲げ
ているこれらの注釈は、いったいどこから、この「仙家
の竹」という解釈を導き出しているのだろうか。

一条兼良の『惟清抄』は、それまでのいわゆる伊勢物
語古注を否定して新しい注釈の時代を開いたが、その姿
勢を継承したはずの『肖聞抄』等の宗祇流諸注釈が、さ
まざまな面で伊勢物語古注、とりわけ冷泉家流古注の内
容を継承していることは、すでによく知られている。そ
の冷泉家流古注を代表する『十卷本伊勢物語註』（『鉄
心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊・一』）には、問題の部分
について、「我門ニ千丈アル竹ヲ」という形の本文が示
された上で、「此歌ノ本文、稽相千丈之竹ノ事也」とい
う注記が加えられている。この「稽相千丈之竹」の故事
は、冷泉家流古注の系統に立つ注釈には広く共通して記
されているものだが、いま、片桐洋一氏が「伊勢物語の
研究・資料篇」に翻刻された宮内庁書陵部蔵『伊勢物語
抄』の六段注から、該当する部分を引用しておく。（他
本によって一部本文を改めた。）

史記に云はく、「稽相千丈ノ竹、能ク響エテ日月出テニ
葉間ニ、栄長年重ナリテ露滯滑ナリ、門前成シテ市ヲ
得ルモノニ彼ノ葉ヲ一、得テニ上寿ヲ一嘲ルニ此命ヲニ云々」

と。是は知興と云ふ人山に入りて薪をとるに、庭鳥

の鳴く所の有りければたづね行きて見るに、竹一本雲に生ひのぼりて、其の葉の間に日月かがやきて、鶴の鳴く。其の本に仙人ならびゐて、此の竹の葉より落つるしづくをのめば、皆命長き也。知興又此の露をなめて仙人となれり。知興の子にけいさうと云ふ者、親を尋ね行きて、又、此の葉をえて仙人となる。(下略)

『史記』からの引用として掲げられている「稽相千丈ノ竹、能ク聳エテ」以下の文は、漢文としては変則的であり、中国で書かれたものとは思えない。当然のことながら実際に『史記』の中にも見えないが、この種の怪しげな用例や典故は、伊勢物語古注には数多く見出される。「千尋ある竹」という本文を用いていた冷泉家流古注は、ここでそれを説明するために、「稽相千丈之竹」という伝来不明の説話を『史記』の名のもとに持ち出しているのである。「肖聞抄」等の宗祇流諸注釈が、そして兼良の「惟清抄」までもが記していた「千尋あるかげ」とは仙家の竹也」という注記は、「千尋ある竹」という本文を説明していたこの冷泉家流古注の内容を、そのまま「千尋あるかげ」という本文の説明にまで転用したものであったと考えられる。これによって、「千尋あるかげ」は、そのまま、「千尋ある(仙家の)竹のかげ」という意味に理解されることになったのである。

そして、実は、『山海経』の「尋竹」を「千尋あるか

げ」の典故として紹介した「勢語臆断」にも、その部分の直前に、「千尋あるかげ」とは仙家の竹の蔭なり」という、前代の諸注釈と同様の注記が記されていた。

『勢語臆断』には、それ以前の注にない新見も多く示されているが、その反面、既存の注釈をそのまま用いた部分も少なくなく、いま問題にしている注記もその一例であった。暗黙のうちに冷泉家流古注を継承していた「惟清抄」や「肖聞抄」等の見解は、その注記を通して、そのまま『勢語臆断』にまで受け継がれていたのである。さきに問題にした『山海経』の「尋竹」という典故は、このような読解の上に立って見出されたものであった。このように冷泉家流古注の影響力は大きく、目に見えない形で『勢語臆断』にまで及んでいたが、その『勢語臆断』で示された「尋竹」という典故によって、冷泉家流古注の読解は姿を変えてさらに後代にまで伝えられることとなった。そしてそもそも、その「尋竹」を「千尋あるかげ」や「千尋ある竹」の典故とすることについては、郭璞の注記をめぐる問題もあって、なお疑問とせざるを得ないこと、すでに述べたとおりなのである。

四

「千尋あるかげ」ないしは「千尋ある竹」という本文の理解をめぐる注釈史を概観すると、以上のような問題が浮かび上がってくる。これらの問題の正確な認識なく

して、伊勢物語七十九段の正しい理解は不可能と言わねばならない。だが、それではこの部分の表現について、いったいどのような解釈が可能なのだろうか。

伊勢物語とも深いかわりを持つ中唐の詩人・白居易の詩には、「池上」すなわち自邸の池のほとりに題材を取った作品が多いが、その中の「池上作」と題された二十句の詩は、次のように始められている。

西溪風生竹森森。

西溪風生じて竹森森。

南潭萍開水沈沈。

南潭萍開きて水沈沈。

(中略)

澄瀾方丈若万頃。

澄瀾方丈万頃ばんびんの若し。

倒影咫尺如千尋。

倒影しやうえい咫尺千尋の如し。

(下略)

白居易はここで、「退老の地」である自邸の庭の池の水面に影を落としている竹の影を、あたかも「千尋」の如き趣があると自讃している。ここでは、「わがかど」に植えられた竹の「かげ」があたかも「千尋」の如くであると述べられていて、伊勢物語七十九段の和歌と多くの共通点を持っていることが注目されるのである。白居易の詩の中の「千尋」は、地上の竹とは上下逆に、水面から水底にむかって伸びている竹の「倒影」の長さ、つまりは深さについて用いられているが、それは、峡谷や深海の深さの形容に用いられることが多い「千尋」という語の特性にもかなった用法と言ってよい。和語の「ち

ひろ」もまた、樹木の高さなどには一般に用いられることの少ない語と言ってよいが、それが「千尋あるかげ」という表現で用いられている背景に、この白居易の詩の影響が考えられはしないだろうか。「わがかどに千尋あるかげを植えつれば」という表現から、当時の人々は白居易のこの詩を思い浮かべ、その「かげ」が竹の「かげ」であることを、それによって容易に連想し得たのではなかったかと考えられるのである。すなわちこの場合、本来の本文は「千尋あるかげ」であったことになる。

もとより、水面に映る「影」と庇護の意にも通じる「蔭」は本来異なった語であり、安易な混同は避けねばならないが、「影」と「蔭」という二つの文字には意味的に重なる側面もあり、また、ともに「かげ」と訓読される両者が和歌において掛詞的に用いられていることも考えられる。「勢語憶断」には『山海経』の他に『博物志』の「止些山ニ多シレ竹。長サ千仞」という例も示されており、なお残された問題は多いが、「千尋あるかげ」という表現の根拠を説明するひとつの方法として、この「池上作」という詩の存在に、いまは注目しておきたい。伊勢物語中には、三月の末日すなわち三月尽の日に主人公が藤の花を人に贈ったことを述べる八十段のように、白居易の詩をふまえなければ理解できない章段が、他にも見られるからである。

(国文学者・京都光華女子大学教授)